中段左から4人目 筆者

700円という寮費の安価以外は魅力を感じなかった。例えば、壁が薄く、隣の部屋のいびきさえ聞こえるという話、「年功序列」制度が厳しく、「先輩が、カラスが白いといえば白い」という言葉が昔から言い伝えられているという話、秋の啓明寮祭ではふんどしになって町を歩かなければならない話。この話を聞いた時は、自分が啓明寮に入寮するとは思いもしなかった…

そんなとき、啓明寮生の部屋に遊びにいくことになった。寮に遊びにいって驚いたのは、寮生同士の関係だ。廊下ですれ違えば、みんな挨拶をする。一緒に食事をしている寮生、仲良くお風呂に入っている寮生もいる。大きな黒板には色々な情報が記載されており、コミュニケーションの場になっている。その黒板の前には、大量のミカン。黒板には「食べてください」の文字。実家が農家の寮生の方が、お土産に持ってきてくれたらしい。寮生にとっては当たり前のことが、私にはすべて新鮮だった。隣に誰が住んでいるかわからないアパート生活など、近隣とのコミュニケーション不足が当たり前となってきている現代で、この寮はなんて人と人との交流が活発な場所なのだろう。現代には足りないものが、ここにはある。私はその後、頻繁に寮に通うようになり、ついには寮生になることを決意した。

最初は抵抗があった啓明寮祭のふんどしだったが、いつのまにか、啓明寮祭に参加するために、卒業した後も鶴岡に遊びに行くほどになっていた。卒業して8年が経過した今でも、啓明寮生の結婚式では、余興としてふんどしを履き、法被を着用して祝福している。

啓明寮が老朽化し、建て直しを行ったそうだが、あの時の思い出は忘れないし、啓明寮生同士の交流も続いていくだろう。新しくなった啓明寮で、若い啓明寮生が、あの時の私たちと同じように、寮生活のすばらしさを感じてもらえたら幸いに思う。啓明寮に入寮して本当に良かった。

学生寮の回想「今日の夕飯は美味しかったよ・ごちそうさん」

鶴岡市在住
遠藤　文子
（平成21年農学研究科修了）

農学部の学生寮としては、昭和24年に北辰寮が最初であり、定員は10名であった。さらに同年12月には定員16名の高畑寮が整備された。昭和27年7月には定員43名の旧啓明寮が建設され、北辰寮はこのときに廃止された。その後大学の学寮整備計画案の策定により、現在の場所に昭和41年3月に鉄筋2階建ての定員104名で2人相部屋の啓明寮（男子寮）が新築され、旧啓明寮と高畑寮は廃止された。新寮は当時としてはモダンな寮であった。

そして啓明寮は、平成25年3月に、老朽化した寮の機能を全面リニューアルして全室個室の男女共用（1階男子44名・2階女子27名計71名）の学生寮に生まれ変わった。

寮の食事を顧みると、昭和27年9月以降からは、寮の炊事関係等をお世話する定員内の職員が採用され、当時は藤正恵さん（昭和27年9月1日～昭和50年3月31日）、石原照さん（昭和27年11月1日～昭和60年3月31日）、佐藤コハキさん（昭和33年2月10日～昭和58年3月31日）の3名が担当されていた。

この頃は3食の食事提供で、朝食はパンと牛乳のみではあったらしいが、昼食と夕食は手作りの食事で、安くて美味しい食事を提供することで3名の方々は、それなりの工夫を重ねておられたようでした。

3名の職員が退職された後、国の定員削減施策により後任不補充となり、寮には1名の職員と臨時的に補助していただく方が採用された。また昭和59年4月からは、研究室勤務だった佐藤愛子さん（昭和59年4月1日～平成5年3月31日）が人事異動により厚生係に配属され、寮を担当することとなった。

愛子さんは、寮生の皆さんに安い経費の中でいかに美味しく、安心して食べていただける食事の提供に、彼女自身の食に対する惜しまない研鑽と寮食調理に欠かせない調理器具を粘り強く要求して一つずつ実現し、この頃から寮の食事も現代風に変化していったとお聞きした。愛子さんとご一緒に働かれた宮内徳子さん、佐藤淳さんと、愛子さんが学科運営協力室へ配置換えになった後には菅原貞子さんが加わり、3名で寮食を最後まで担当してくださった。

今回この特集にあたり、献立から寮内のこと一切を最後まで取り仕切ってくださった宮内徳子さんに当時の思い出をお聞きすることができた。

愛子さんが寮を離れられ

ある日の夕食

配膳棚

思い出の啓明寮正面玄関（平成21年10月9日筆者撮影）

た時からは夕食のみの提供となり、1食あたり３４０円で準備する献立に苦労しましたが、幸いにも鶴岡市内の食材を扱う業者さんの格別な配慮にはとても助けられました。また、季節感を出すように献立を作成した苦労話。土用の時はウナギはとても高価なので、サンマの蒲焼き丼にして、彩り良くほうれん草の味付けしたもの、ピンク色のしょうが等を盛りつけした丼に工夫をしたこと。また追い出しコンパでは、普段は１５０グラムのステーキ肉だったが、この日は格別で２００グラムのステーキ。美味しい食事を出した時には、その調理方法を聞いてくる人、また中には様々に特技のある寮生さんがいて生ハムを作ってくれたり、野菜を作って提供してくれたり、寮周辺の草刈りで汗を流してくれた人。また、春と夏休みの長期休暇の前には、寮生全員が参加した大掃除、このときには厨房の排水等の清掃や私達の手の届かない箇所を受け持ってくれたりしたもんですよ。また、啓明寮祭では紅白の餅をついたり、御輿を作ったり、わいわい騒いでその後には私達を一緒に打ち上げコンパに招待してくれたりの楽しい思い出でした。若い寮生さんといるのがとても楽しかったですよ。

「今日の夕飯は美味しかったよ、ご馳走さん」の声をかけていただいたことや卒業後に今でもおたよりや年賀状で近況を連絡してくださる寮生さんもおり、25年近く寮でお世話になったことは忘れることの出来ないものですよ」と目を細めて楽しそうに語ってくれました。

筆者も演習林の苗圃（苗畑）に調査にいくと休憩時間には旧啓明寮にお邪魔してお茶をご馳走になったことも度々ありましたし、学務係では寮の担当もさせていただきました。自治寮として機能していたため、寮の経費負担区分の要求の解決や女子学生が入寮出来ないことへの要求等があったり、入り口が電子錠になった事の取り扱い、国勢調査の対応など様々なことがありました。

世の風潮と言えばそれまでですが、この度、女子学生27部屋が出来たことやオール電化されたこともとても喜ばしいことですが、大先輩の寮生が3食（その後は2食、1食）付きの食事で学生生活を送っていた啓明寮であり、それをお世話してくださった炊事担当の大勢の職員が、我が子に食べさせるように食事作りに携わっておられたこと、そして60有余年もの長い間寮食があり、炊婦さん達に「ごちそうさん」という感謝の念を持った多くの先輩がおられたことを知っていただければ嬉しい限りです。

退職に寄せて

大学人としての34年を顧みて
―研究・教育・自治―

食料生命環境学科
森林科学コース
教授　菊間　満

１９８１年８月16日に、私と誕生年を共にする東京の（財）林業経済研究所から、助教授として農学部に赴任しました。林政学研究室の教授としては初代の澤田和博先生（１９８１年退官）、二代目の有永明人先生（２００５年退職）の後、１９９２年に三代目を引き継ぐことになりました。自分なりに納得のいく研究と教育ができたことは、両先生が作られた研究室の良好な環境によるところが大きく、またそれは研究室の事務官、富樫一子さん（２００１年退官）の存在なくしてはありえなかったことです。

幸いなことに、地域の少なくない実践者と交流を重ねる中で、この地でしか取り組めないような多くの、先端と境界の両領域の研究テーマを見つけることができ、思いもよらず34年間も鶴岡で実りの多い研究生活を送ることになりました。主に林業労働論、住宅市場論、協同組合論、ロシア林業論、非木材林産物の森林経営などに関して、単著、編著、共著、分担執筆と様々ですが、鶴岡で20冊の著書を出版することができました。このうち、建築家の増田一眞氏との共著である『甦る住文化』は東北森林科学会賞を受賞し、さらに拙訳の『ＩＬＯの林業労働監督ガイドライン』は日本図書館協会選定図書に選ばれました。

赴任の翌年に、林政学分野の伝統的なカリキュラムを経済論、政策論、団体論の三本柱構成に改めました。その中の団体論の一環として、１９８３年に森林組合論の講義を全国で最初に開講し、現在まで単位組合、全森連の実践者を非常勤講師として迎え実施してきました。また、法人化により、国立大学演習林は文科省所管国有林から民法登記団体の私有林になったことから、山大演習林は２００７年に全国最初に地域の森林組合に加入しました。大学演習林の協同組合加入は日本の林業制度上、かつてない画期的なことですが、これも森林組合論講義の成果なしにはありえなかったことでしょう。助教授、教授として卒業論文作成を担当した学生に限りますと、２０１４年卒業までで１６６人を数えます。そのうち約６割は国と地方の公務員、約１割は森林組合、農協、労協などの協同組合になります。ただ、平成不況以降は、学んだ専門性を生かせる民間の職種は激減し、公務員と森林組合職員が唯一の職種となってしまいました。林政学研究室はとりわけ公務員試験合格者の多い「優良例」ですが、他面では農学部全体のやむを得ざる対応の典型例でもあります。公務員以外の分野で、学生が学んだ専門性を生かせる職種を創造することが、林学系教員、そして農学部教員に共通かつ焦眉の課題になっています。若い先生方には自分の研究と共に、この問題に正面から取り組んでいただきたいと思います。

かつて農学部は全学から、大学自治の北極星と敬意をこめて呼ばれていました。農学部の多くの先輩諸先生が大学自治を守る取り組みに献身されてきたが故なのです。私も、教授会や職員組合などの運営や活動を通して、大学人としての見識を学び、また矜持も多少なりとも引き継ぐことができました。若輩者には身に余る幸運としかいいようがないことでしたが、こうした機会をくださった皆さんに誌上をお借りして改めてお礼申し上げます。

この中でも特に記憶に残るのは、赴任早々、新米書記長として当たった山大職組と学長との交渉の席で感じた、後に世界科連副会長をなさった広根徳太郎学長のリベラリズム、そして卒業式の学長告辞で認識させられた久佐守学長の科学者・教養人としての真摯さと人間性です。特に、農学部職員組合の取り組んだ農場職員の公務災害認定に理解を示された久佐先生の大学人としての姿勢は、大学自治への確固たる信念があってこそのことと、法律上は教授会自治さえも否定されてしまった今日では、その信念の重みを痛感せざるを得ません。

鶴岡 旅館 ―― 会議・会食・宿泊に ――
月山荘
庄内地方の自然の恵みをご用意して皆様のお越しをお待ち申し上げております。
〒997-0032 山形県鶴岡市上畑町10-77　電話（0235）23-1125
http://www2.jan.ne.jp/~gassanso/

最後になりましたが、同窓会の皆様のご多幸と農学部の発展を心から祈念して、お礼とお別れの言葉にいたします。

もう一度、農学部が山大の北極星となることを願いつつ。

退職に寄せての御礼

やまがたフィールド科学センター
教授 吉田 宣夫

平成20年5月1日付けで山形大学農学部に赴任後、約7年間の教員生活は一瞬の出来事のようです。山形県は前任機関のころより大変お世話になっていた県であり、着任早々に山形県の畜産・普及関係職員の方々に歓迎会を開いていただきました。とても嬉しい出来事でした。同時に地域農業と農学部教員、地域社会と山形大学の関わり方などその責任の重さも感じてきました。

言われて久しい人口減少と少子高齢化の進度は、一部都市域を除き深刻さは全県的で、そのなかにあって畜産業が資源循環の核となっていることを確信させられました。県関係機関、市町村、畜産関係団体の素敵な方々と思いを共有しながら研究・普及活動で全県を回らせていただきました。地方大学のあり方が厳しく問われている時代、農学部が地域に立脚できることが組織的にも研究テーマでも、さらにそこで活躍できる人材育成においても深化して欲しいと願っています。

教育・研究では、高橋敏能名誉教授、堀口健一教授、新任の松山裕城准教授とともに畜産学研究室の一員として自給飼料研究を中心軸に展開することができました。なかでも着任間もなく関わらせていただいている農水省国産飼料プロジェクトは、その使命とともに予算額、研究課題数ともに大きく責任の重いものでした。講義では、学生からの質問・意見に対して、次回講義ですべてにワンポイント解説を行いました。20年間程度の人生の知識経験の限界と同時にキラリと光る可能性も発見でき、毎回の講義は楽しいものでした。学生の感想を聴いて、国立国会図書館の壁面に刻まれている「真理がわれらを自由にする」を想起せざるを得ませんでした。これは設立理念「国民に知る自由を保障し、健全な民主社会を育む礎となっていかねばならない」としたもので、教員としての使命にも通じていると思いました。

最後になりますが、大学教員として経験が浅く多くの失敗を重ねた小職を支えていただいた先生方、事務・技術職員に対し誌面をお借りしてお詫びと御礼を申し上げます。

(有)月山パイロットファーム
未来を支える
「食」を求めて
鶴岡市三和字堂地60
Tel 0235-64-4791
会長 相馬一廣
(昭和45年農学科卒)

自然との調和を図る優れた技術!

業務内容
道路・橋梁・各種構造物調査設計／農業土木調査設計／農業集落排水
測量調査・地質解析／上下水道調査設計／河川・砂防調査設計／港湾・漁港・海岸調査設計
都市開発計画／環境アセスメント／施工管理／構造物維持管理（橋梁定量的診断ほか）

株式会社 帝国設計事務所
認証 ISO 9001

代表取締役社長 菅原 義昭（農工40年卒・技術士）
技術顧問 磯部 勝彦（農工52年卒・技術士）

〒065-0025 札幌市東区北25条東12丁目1番12号 帝国ビル
TEL 011-753-4768 FAX 011-753-0488
URL：http://www.kk-teikoku.jp